【論　　文】

フィクションとしての「問鉄砲」（パート２）
―家康神話創出の一事例（その２）―

白　峰　　旬

【要　　旨】

関ヶ原の戦い（慶長５年９月15日）において、徳川家康が命じて小早川秀秋の松尾山の陣所に向けて鉄砲を撃たせたことにより小早川秀秋の軍勢が家康方に寝返ることになった、いわゆる「問鉄砲」の話については、家康方の軍勢の勝利を決定付け、戦局の流れを変えたとされており、これまで従来の研究史では歴史的事実とされてきた。しかし、「問鉄砲」に関する諸史料（江戸時代の編纂史料）を精査検討した結果、「問鉄砲」に関する話は歴史的事実ではなく、江戸時代における家康神話創出を背景として、「問鉄砲」に関する話が創作された、との結論を得た。

【キーワード】

関ヶ原の戦い、徳川家康、小早川秀秋、問鉄砲、家康神話

※拙稿「フィクションとしての「問鉄砲」（パート１）―家康神話創出の一事例（その１）」（『別府大学紀要』54号、別府大学会、2013年）より続く。

４．『朝野旧聞哀藁』における「問鉄砲」の記載内容（その２）

『朝野旧聞哀藁』の「東照宮御事蹟」別録三十五（庚子九月十五日御先手始末之十）における、「問鉄砲」についての綱文を以下に示すことにする[59]。

午刻にいたり、羽柴小早川中納言秀秋の内應覚束なきよし、御本陣に告奉るにより、公気色ありて、藤堂佐渡守高虎に命セられ、かの陣に鉄砲をうたしめ給ふ、此事、諸説區なり、いま貞享奥平美作守書上、聿修録、井伊家慶長記等を合考して記す〇考證ハ本編此日の第六にあり

奥平藤兵衛貞治、貞治は御目付として羽柴秀秋か陣中にあり、及ひ黒田甲斐守長政の家士・大久保楮之助等、長政の質として、また羽柴秀秋の陣にあり、羽柴小早川秀秋

に兼約の内應を促すにより、秀秋老臣平岡藤蔵を先手に遣ハし、初て手返しの令を發し備を立かへ松尾山を下らんとす、

※下線引用者。下線部分は原文では割注になっていて小さい字で記載されており、按語（『朝野旧聞裒藁』の編者による考えを示す）に該当する。

この綱文（とその中の按語）の要点をまとめると、①午の刻（＝昼の12時頃）になり、小早川秀秋の内応が疑わしい旨の（報告が）、（家康の）の本陣に告げられた、②このため家康は、気色（きしょく）が変わって、藤堂高虎に命じて小早川秀秋の陣に鉄砲を撃たせた、③このこと（＝どの隊が松尾山の小早川秀秋の陣に向けて鉄砲を撃ったのか、ということ）については諸説があり、まちまちである、④今回は、『貞享奥平美作守書上』、『聿修録』、『井伊家慶長記』等を考え合わせて、（藤堂高虎隊が小早川秀秋の陣に向けて鉄砲を撃った、と考定して）記すこととする、⑤家康から目付として小早川秀秋の陣中に遣わされた奥平貞治と黒田長政の家臣の大久保楮之助が内応を督促したことにより、小早川秀秋は裏切って松尾山を下ろうとした、というようになる。

藤堂高虎隊が単独で小早川秀秋の陣に向けて鉄砲を撃ったとしている点と、どの隊が松尾山の小早川秀秋の陣に向けて鉄砲を撃ったのか、ということについては諸説がありまちまちである、としている点は、前掲の『朝野旧聞裒藁』（「東照宮御事蹟」第三百九十二）における綱文の内容と同じである。『朝野旧聞裒藁』（「東照宮御事蹟」別録三十五）では、上記の綱文の次に、『貞享奥平美作守書上』、『寛永奥平藤兵衛貞治譜』、『関原御陣前よりの書物』、『黒田氏関原記』、『黒田家譜』、『落穂集』、『武功雑記』、『関ヶ原合戦誌記』、『別本慶長軍記』、『関原軍記大成』、『翁物語』、『関ヶ原一乱志』、『東西記』、『落穂雑談一言集』の各史料本文の該当箇所を引用している。

この中で「問鉄砲」についての記載がある史料は、『貞享奥平美作守書上』、『落穂集』、『関ヶ原合戦誌記』のみであり、他の史料は、小早川秀秋家臣の松尾主馬が主命に逆らって戦線を離脱した話などに関する内容である。その『貞享奥平美作守書上』、『落穂集』、『関ヶ原合戦誌記』について摘要をまとめたものを表１において提示した。

表１を見るとわかるように、江戸時代前期の天和期～貞享期に成立した『貞享奥平美作守書上』（『貞享書上』の成立は天和３年〔1683〕～貞享元年〔1684〕）、『関ヶ原合戦誌記』（貞享４年〔1687〕成立）では、藤堂高虎隊が単独で小早川秀秋の陣に向けて鉄砲を撃った、としている。このことは、上述したように藤堂高虎隊が単独で鉄砲を撃った、とする史料の初見が、管見では『井伊家慶長記』（寛文12年写）であるので、その影響を受けていると考えられる。

江戸時代中期に成立した『落穂集』（享保13年成立）では、家康麾下の布施孫兵衛の隊が単独で撃った、としているが、この点については、『落穂集』について上述した通りである。

こうした点も含めて、小早川秀秋の陣に向けて鉄砲を撃った主体について、表１所収の

諸史料における記載の変化を時系列でまとめたものが図２である。

図２を見ると、それぞれの説の初見の史料をもとに、その後それぞれの説が派生していったことがわかる。現在では、上述のように『日本戦史　関原役』が『関原軍記大成』の記載内容をもとに、福島正則隊と家康麾下の布施孫兵衛の隊が共同で撃った、とする説をとっているため、今日ではこの説が一般に広く流布しているが、図２を見るとわかるように、史料上に見える最初の説は、藤堂高虎隊が単独で鉄砲を撃った、とする説であり、同様の説をとる史料も多いことがわかる。

５．「問鉄砲」に関する話のバリエーション

図２を見るとわかるように、「問鉄砲」の主体については、いくつものバリエーションが存在する。主体別に分類すると以下のようになる。

Ａ．藤堂高虎隊が単独で撃った
Ｂ．藤堂高虎隊と京極高知隊が共同で撃った
Ｃ．福島正則隊が単独で撃った
Ｄ．福島正則隊と家康麾下の布施孫兵衛の隊が共同で撃った
Ｅ．家康麾下の布施孫兵衛の隊が単独で撃った

これらのバリエーションが時系列に従って（時代の経過とともに）変化していった点は上述したが、「問鉄砲」の話に関して、これ以外の分類として以下の項目にも注意する必要がある。

▼黒装束の武者は実在したか？

黒装束の武者が家康に対して、小早川秀秋の内応が疑わしい旨の報告をした話が出てくる史料がある。黒装束の武者が家康に報告する、というのはいかにも小説的なドラマチックな設定である。この黒装束の武者（或いは、それに近い記載）についての記載があるのは、『黒田家譜』、『石田軍記』、『関原御合戦当日記』、『五本関原日記』、『濃州関原合戦聞書』、『慶長記畧抄』、『関原物語』、『石卵餘史』、『関ヶ原合戦誌記』、『武徳安民記』、『関原大條志』[60]である（表１参照）。この中で成立年代が明らかなものは、『黒田家譜』（元禄元年成立）、『石田軍記』（元禄11年成立）、『関ヶ原合戦誌記』（貞享４年成立）、『武徳安民記』（安永５年〔1776〕成立）、『関原大條志』（貞享３年〔1686〕写）であるので、初見とそれに続く時代としては貞享期～元禄期の史料にみられる特徴と言えよう。

なお、前掲の『朝野旧聞裒藁』（「東照宮御事蹟」第三百九十二）における綱文では、「武者一騎」と記しており、黒装束とは記していない。その理由は、黒装束という形容に対して『朝野旧聞裒藁』の編者が疑問を抱いたからかもしれない。

黒装束の武者が家康の前に登場するというのは、読む者の想像力をかきたてるが、歴史的事実ではない小説的な創作と考えた方がよかろう。

▼白い笠印を付けた足軽は実在したか？

松尾山の小早川秀秋の陣に向けて鉄砲を撃った足軽が白い笠印を付けていた、という記

載は、『黒田家譜』、『石田軍記』、『関原物語』に見られる（表１参照）。この３つの史料はいずれも、福島正則隊が単独で撃った、としている点が共通している。上述した黒装束の武者は、この３つの史料にいずれも出ているので、黒と白という絶妙のコントラストで読む者に強く印象付けるが、これも歴史的事実ではなく小説的な創作と考えた方がよかろう。

▼「問鉄砲」を撃ったのは20人か？或いは50人か？

「問鉄砲」を撃った足軽の人数について、20人（或いは、鉄砲20挺）とするのが『黒田家譜』（福島正則隊）、『関原軍記大成』（福島正則隊と家康麾下の布施孫兵衛の隊）、『改正三河後風土記』（異説扱いとして、福島正則隊と家康麾下の布施孫兵衛の隊）、『井伊家慶長記』（藤堂高虎隊）であり、50人とするのが『石田軍記』（福島正則隊）、『関原物語』（福島正則隊）である（表１参照）。よって、20人とする史料の方が多いが、鉄砲を撃ったのがどの隊であるのか、という点は史料により違いがある。

▼「問鉄砲」は空砲だったのか？

「問鉄砲」は空砲だった、とする史料は『石田軍記』（福島正則隊）、『井伊家慶長記』（藤堂高虎隊）、『関原物語』（福島正則隊）のみであり、史料の数としては多くない（表１参照）。史料の成立年で見ると、『石田軍記』（元禄11年成立）、『井伊家慶長記』（寛文12年写）、『関原物語』（元禄９年写）というように寛文期、元禄期であり、江戸時代前期・中期の史料ということになる。

なお、『石田軍記』、『井伊家慶長記』を見るとわかるように、空砲であったためなのか、小早川秀秋の陣に対して「問鉄砲」の影響（効果）が全くなかった、としている点は注目される。「問鉄砲」の影響（効果）の有無についての詳しい考察は後述する。

▼つるべ撃ちをおこなったかどうか？何回撃ったか（１回か、２回か）？

松尾山に向けて鉄砲をつるべ撃ちにした、とする史料は、『黒田家譜』、『関原軍記大成』、『改正三河後風土記』、『関原物語』である（表１参照）。このうち『黒田家譜』は２回つるべ撃ちにした、と記している。『関原軍記大成』は10挺ずつをつるべ撃ちにした、と記しているので、この場合も２回つるべ撃ちをしたことになる。

このように、つるべ撃ちをおこなったとする史料は元禄期以降の史料であり、多くの史料ではないので、「問鉄砲」を勇壮におこなった、という印象を与えるための後世の脚色であり、小説的な創作と考えた方がよかろう。

▼久保島孫兵衛は実在の人物か？

家康に対して、小早川秀秋の内応が疑わしい旨の報告をした人物を久保島孫兵衛とする史料は、『関原軍記大成』、『改正三河後風土記』、『落穂集』、『天元実記』であり、『黒田家譜』は異説として掲げている。『徳川実紀』は「久留島孫兵衛某」としている（表１参照）。この中で史料の成立年が最も早いのは元禄元年の『黒田家譜』である。久保島孫兵衛について、『関原軍記大成』、『黒田家譜』は家康の御家人としている。

上述のように、『朝野旧聞裒藁』（「東照宮御事蹟」第三百九十二）の綱文では、『寛永譜』（＝『寛永諸家系図伝』）・『貞享書上』をはじめとして諸記録すべてに「久保島」という

者の記載がないので（久保島孫兵衛の存在は）疑わしい、と考定して、そのため、今回はこれらの（諸史料）の見解にはすべて従わない、としている点は重要である。

久保島孫兵衛については、『寛政重修諸家譜』にも記載がないので（久留島孫兵衛についても『寛政重修諸家譜』には記載がない）、江戸時代中期（元禄期頃）になって創作された架空の人物であると断定してよかろう。久保島孫兵衛がもし、実在の人物であるならば、このような重大な局面で重要な役割を果たしたわけであるから、家譜などの諸記録が残らないということはあり得ないであろう。

▼布施孫兵衛と堀田勘左衛門は実在の人物か？

松尾山の小早川秀秋の陣に向けて鉄砲を撃った隊の鉄砲頭として、布施孫兵衛（家康麾下）と堀田勘左衛門（福島隊）について記している史料は、『黒田家譜』（異説として掲げる）、『関原軍記大成』、『改正三河後風土記』（堀田勘左衛門については異説として掲げる）、『落穂集』、『天元実記』（布施孫兵衛のみを記す）であり、史料の数としては多くない（表１参照）。

布施孫兵衛について、『黒田家譜』では（家康の）本陣から（来た）とし、『関原軍記大成』[61]では家康の弓長とし、『関原軍記大成』（『朝野旧聞裒藁』、「東照宮御事蹟」第三百九十二、所収）では家康の銃頭とし、『改正三河後風土記』では（家康の）鉄砲頭とし、『落穂集』、『天元実記』では（家康の）先手の物頭としている。このように史料によって一定しないが、現場で家康麾下の鉄砲隊を指揮したのであるから、本来であれば鉄砲頭でなければならないことになる。

布施孫兵衛というのは実在した人物なのであろうか。『寛政重修諸家譜』[62]、『寛永諸家系図伝』[63]には、布施重次（布施孫兵衛）として記載があるので、実在の人物であることは確かである。『寛政重修諸家譜』では、布施重次について、関ヶ原の戦いに供奉し、慶長６年（1601）に弓頭になり同心10人を預けられた、とあるので、布施重次が弓頭になったのは関ヶ原の戦いの翌年であったことがわかる。しかし、『寛政重修諸家譜』（布施重次の項）には「問鉄砲」に関する記載はなく、「問鉄砲」の話が歴史的事実であれば、このような重要な役割を果たしたことが当然載せられたはずであろう。このように考えると、慶長５年の時点で鉄砲頭ではなく、鉄砲隊を指揮する立場にはなかった布施孫兵衛が鉄砲隊を指揮して「問鉄砲」を撃たせた、とする話自体に疑義が生じることになる。

堀田勘左衛門について、『黒田家譜』、『関原軍記大成』では福島正則の鉄砲頭とし、『改正三河後風土記』では福島正則の物頭としている。「問鉄砲」を撃つことを指揮したのであれば、福島正則の鉄砲頭が正しいはずである。

それでは、福島正則の家臣で鉄砲頭をしている堀田勘左衛門という人物は実在したのであろうか。慶長５年の史料ではないが、『福島忠勝大坂陣備人数帳』（慶長19年〔1614〕11月６日付）[64]には、310石で「堀田勘右衛門」という人物の記載があり、『福島正則分限帳』（慶長末年成立）[65]には、311石８斗で「堀田勘右衛門」という人物の記載がある。しかし、これらの史料には鉄砲頭という記載はなく、名前も「勘左衛門」と「勘右衛門」という違いがあり、同一人物かどうかわからない。よって、堀田勘左衛門が福島正則の家臣であ

り、その鉄砲頭をしていた、とする一次史料はなく、そのことを史料的に確定させることはできない。

▼「問鉄砲」の効果はすぐにあったのか？

上述のように、現在では『日本戦史　関原役』における「問鉄砲」の記載内容が有名になっている関係上、「問鉄砲」の効果がすぐにあったとするイメージが強いが、諸史料における「問鉄砲」の記載内容を検討すると、「問鉄砲」の効果が全くなかった、としている史料も多いことがわかる（表１参照）。

「問鉄砲」の効果が全くなかったとする史料は、『井伊家慶長記』（寛文12年写）、『関原大條志』[66]（貞享３年写）、『関ヶ原合戦誌記』（貞享４年成立）、『黒田家譜』（元禄元年成立）、『石田軍記』（元禄11年成立）、『濃州関原合戦聞書』[67]（成立年不明）である（表１参照）。

それに対して、「問鉄砲」の効果があったとする史料は、『本朝武林伝（稲葉）』（延宝７年成立）、『関原物語』[68]、（元禄９年写）、『落穂集』（享保13年成立）、『天元実記』（天保４年以前に成立）、『聿修録』（文政元年〔1818〕）、『改正三河後風土記』（天保４年成立）、『徳川実紀』（天保14年成立）である（表１参照）。

『関原軍記大成』（正徳３年成立）は、「問鉄砲」の効果について、あいまいな記載をしている（表１参照）。

このように見ると、江戸時代前期（寛文期、貞享期）とその少しあとの元禄期の史料では「問鉄砲」の効果が全くなかったとしている点は注目される。「問鉄砲」の効果があったとする、延宝期の史料である『本朝武林伝（稲葉）』でも、しきりに小早川秀秋の軍勢が周章した、としているだけで、すぐに松尾山を駆け降りた、とは記されていない。

その後、「問鉄砲」の効果があって、すぐに小早川秀秋の軍勢が松尾山を駆け降りた、というように話を改変したのが、江戸時代中期（享保期）の『落穂集』であり、この改変された話はそれ以降、文政期、天保期の史料に継承されていった。特に『徳川実紀』（天保14年成立）でこの改変された話を採用したことは、「問鉄砲」が抜群に効果を発揮した、という見方を後世に喧伝するのに大きな影響力を持った。

おわりに―「問鉄砲」の話が創作された歴史的背景―

上述のように、管見では、「問鉄砲」に関する記載が最初に出てくるのは、江戸時代前期の寛文12年写の『井伊家慶長記』である。上述のように、江戸時代初期から前期に該当する慶長期、元和期、寛永期、慶安期、明暦期の諸史料には「問鉄砲」に関する記載はなく、その後の寛文期の『井伊家慶長記』に「問鉄砲」の記載が出てくるということから、寛文期あるいはそれ以前の近い時期に、歴史的事実ではない「問鉄砲」に関する話（フィクション）が創作された、と考えられる[69]。

『井伊家慶長記』は寛文12年写であるが、寛文12年は西暦では1672年であり、1600年の関ヶ原の戦いからすでに70年以上が経過して、リアルタイムでの関ヶ原の戦いの記憶が

人々から薄れていく中で、「問鉄砲」に関する話が創作されたとしても、その話の内容を否定する関ヶ原の戦いを実戦で経験した世代は、この時にはほぼ存命していなかったのであろう。

前掲の『井伊家慶長記』の記載内容は、福島正則が藤堂高虎に合戦を始める時節について聞いたことに対して、高虎は手立てがある、と述べて自分の陣に帰り、高虎が麾下の鉄砲の者20人ばかりを連れて小早川秀秋の陣に向けて空砲を撃たせたが、小早川秀秋の陣は少しも騒がず、一向に敵陣を見おろすだけであった、というものである。この結果に対して、藤堂高虎は、小早川秀秋の心底は疑いない、と述べたとしている。

この記載内容を見るとわかるように、藤堂高虎は自主的に麾下の者に鉄砲を撃たせたのであり、しかもそれは空砲であった、としている。そして、この空砲に対して小早川秀秋の陣では全く騒がず敵陣を見おろすだけであった、としている。つまり、藤堂高虎は家康の命を受けて鉄砲（空砲）を撃たせたのではないという点、藤堂高虎隊が単独で鉄砲（空砲）を撃ったとしている点、鉄砲（空砲）を撃たせた効果が全くなかったという点は注目される。

「問鉄砲」に関する話のプロトタイプはこうした内容であり、それほど劇的な展開を見せる内容ではなく、現在広く流布している「問鉄砲」の話の内容とは大きく異なっている点に注目する必要がある。

家康の命について記載がない点は、『貞享書上』（奥平美作守）も『井伊家慶長記』と同じであり、江戸時代前期に成立した『井伊家慶長記』（寛文12年写）、『貞享書上』（奥平美作守）（天和３年～貞享元年成立）において家康の命について記載がないことは注目される。なお、『本朝武林伝（稲葉）』（延宝７年成立）には家康の命について記載があるので、家康の命というのは当初の話にはなく、あとで付加されたものであることがわかる。

上述のように、その後、江戸時代中期（享保期）の『落穂集』から、家康が命じて家康麾下の布施孫兵衛の隊が単独で小早川秀秋の陣に向けて鉄砲を撃った、という話に改変され、その効果についても、家康の考え通りに、小早川秀秋の軍勢がそれより色めき立って麓へ下った、というように改変された。

『落穂集』は軍学者である大道寺友山が晩年（享保13年）に著したものであり、大道寺友山は生年が寛永16年（1639）、没年が享保15年（1730）であるので、関ヶ原の戦いがあった慶長５年の時点では生まれていなかった。大道寺友山は軍学者として会津松平家、越前松平家に仕えていたことや、家康の逸話集である『岩淵夜話』を著していることなど[70]を考慮すると、当時神格化されていた家康に対する畏敬の念やノスタルジアから「問鉄砲」に関する話を家康中心の話（＝家康の英雄譚（えいゆうたん）の一つ）に改変したと推測できる。

その後、江戸時代後期（天保期）になって『徳川実紀』（天保14年成立）に、「問鉄砲」についての改変された話（『落穂集』で改変された話とほぼ同文の話を載せた『天元実記』から引用）が採用されて、家康の命により実行された「問鉄砲」が小早川秀秋の裏切りを誘発することに抜群の効果を発揮した、という話が広く後世まで認知され、今日まで定着することになった。

『徳川実紀』の編者は幕府の奥儒者・成島司直であり、徳川史観のイデオローグであったと見なされる。『徳川実紀』は文字通り徳川家の正史であり、成島司直は家康の事績の一つとして、「問鉄砲」に関する改変された話を『徳川実紀』に挿入して、家康の虚像（英雄像）を作り上げようとした、と考えられる。

この「問鉄砲」に関して改変された話を、成島司直が『徳川実紀』に挿入した狙いは、①家康は混戦の中にあっても常に冷静な判断をして、しかもその判断が抜群の効果を発揮した、②このように家康は何でもお見通しであり、極限の状態でも神がかり的な判断力を示した、③関ヶ原の戦いにおいて、家康は常に軍事的主導権を握っていた、などの点を印象付けて家康神話を創出しようとしたものであろう。

実際には、慶長５年７月に三奉行（長束正家・増田長盛・前田玄以）が「内府ちかひの条々」を出したことにより、家康は公儀から排除され、豊臣秀頼への反逆者と見なされ、軍事指揮権を剥奪（封殺）された状況にあった。そして、関ヶ原の戦いにおいて、活躍して勝因をつくったのは福島正則や黒田長政など前線の豊臣系諸将であり、家康はそうした豊臣系諸将の活躍に便乗して勝利したにすぎなかった。つまり、家康自身の軍事指揮権は上述のように剥奪（封殺）されていたため、関ヶ原の本戦では、その軍事力の中核を家康に味方した豊臣系諸将の戦力に頼らざるを得なかったのである[71]。

関ヶ原の戦いにおいて家康が置かれたこうした現状と乖離する形で、後世、江戸時代後期（天保期）に徳川史観のイデオローグである成島司直により、上述のような「問鉄砲」に関する家康神話が創出されたのである。徳川史観（徳川家＝江戸幕府による政治支配が歴史的に見て正統なものであるとする歴史観）が形成される上で、関ヶ原の戦いは家康にとって正義の戦いでなければならなかったわけであり、家康は常に軍事的主導権を掌握していて家康の狙い通りに勝利したというストーリーが必要であった（ただし、その点は歴史的事実とは大きく異なる）。

その徳川史観を一般にわかりやすく受容させるため、歴史的事実ではない家康の英雄譚の一つである「問鉄砲」に関するストーリーを捏造して広く流布させることは、最も簡便な徳川史観正当化の洗脳方法であったと考えられる。この点にこそ徳川史観のイデオローグである成島司直のねらいがあったのであろうし、その目的は達成されたと評価できよう[72]。

なお、「問鉄砲」の話が歴史的事実ではなかったという点は、一次史料である「（慶長５年）９月17日付松平家乗宛石川康通・彦坂元正連署状写」[73]に「井兵少又福嶋殿、為先手其外悉打続、敵切所を抱有所へ指懸、とりむすひ候刻、筑前中納言殿・わき坂中書・小河土佐父子、此四人御味方被申、うらきりを被致候、則敵敗軍仕」と記されていて、小早川秀秋が開戦直後に裏切った、と書かれていることからもわかる。つまり、小早川秀秋は昼の12時頃まで戦況を見て動かなかったという通説は単に軍記物によって創作された話に依拠したものであり、歴史的事実ではなかったことは明らかである。

今後の課題としては、徳川史観によって脚色された家康の虚像部分（特に関ヶ原の戦い関係）をはぎとる作業が必要になるが、その点の検討については他日を期したい。

［註］

（１）代表的な事例として、笠谷和比古『関ヶ原合戦－家康の戦略と幕藩体制』（講談社、1994年、152頁）、小和田哲男『関ヶ原から大坂の陣へ』（新人物往来社、1999年、148～149頁）、笠谷和比古『関ヶ原合戦と大坂の陣』（吉川弘文館、2007年、140～141頁）などがある。

（２）宮川尚古著『関原軍記大成（三）』〈国史叢書〉（国史研究会発行、1916年、169頁）。

（３）「落穂集」（『朝野旧聞裒藁』第20巻〈内閣文庫所蔵史籍叢刊・特刊第一〉、汲古書院、1984年、759頁）。

（４）前掲『関原軍記大成（三）』（171頁）。

（５）桑田忠親監修・宇田川武久校注『改正三河後風土記（下）』（秋田書店、1977年、337頁）。

（６）「関原軍記大成」（『朝野旧聞裒藁』第10巻〈内閣文庫所蔵史籍叢刊・特刊第一〉、汲古書院、1983年、831頁）。

（７）「関ヶ原御合戦当日記」（藤井治左衛門編『関ヶ原合戦史料集』、新人物往来社、1979年、398頁）。

（８）「五本関原日記」（前掲『朝野旧聞裒藁』第10巻、827頁）。

（９）「濃州関原合戦聞書」（前掲『朝野旧聞裒藁』第10巻、827頁）。

（10）「関ヶ原合戦誌記」（前掲『朝野旧聞裒藁』第20巻、763頁）。

（11）「東西記」（前掲『朝野旧聞裒藁』第10巻、827頁）。

（12）「武徳安民記」（上野市古文献刊行会編『高山公実録』〈藤堂高虎公伝〉上巻、清文堂出版、1998年、209頁）。

（13）参謀本部編纂『日本戦史　関原役』〈日本戦史編纂委員撰〉（版権所有参謀本部、長尾景弼印刷兼発売者・博聞社印刷兼発売所、1894年〔明治27年〕、再版）は、「本編」、「文書」、「補伝」、「附表・附図」の４分冊である。同書の奥付によれば初版は1893年（明治26年）である。本稿では、参謀本部編纂『日本戦史　関原役』〈日本戦史編纂委員撰〉（版権所有参謀本部、元眞社発行、1911年、三版）の「本編」（１冊）と「文書・補伝」（合冊で１冊）を使用した。

（14）前掲・参謀本部編纂『日本戦史　関原役（本編）』（三版）。

（15）前掲・参謀本部編纂『日本戦史　関原役（文書・補伝）』（三版）。

（16）貝原益軒編著『黒田家譜』（歴史図書社、1980年、314～315頁）。

（17）前掲『関原軍記大成（三）』（169～170頁）。

（18）前掲『関原軍記大成（三）』（170頁）。

（19）名古屋市蓬左文庫所蔵『太田和泉守記　全』。

（20）「慶長年中卜斎記」（『改定史籍集覧』第廿六冊、臨川書店、1902年〔近藤活版所〕発行、1984年復刻）。

（21）『當代記　駿府記』〈史籍雑纂〉（続群書類従完成会、1995年）。

（22）『三河物語　葉隠』〈日本思想体系26〉（岩波書店、1974年）。

（23）「藤堂家覚書」（『改定史籍集覧』第十五冊、臨川書店、1902年〔近藤活版所〕発行、1984年復刻）。

（24）岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵『慶長記』（書架番号 P21－86）。岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵『慶長記』（書架番号210.5－26）。

（25）「関原始末記」（前掲『改定史籍集覧』第廿六冊）。

（26）山鹿素行著『武家事紀』中巻（原書房、1982年復刻、原本は山鹿素行先生全集刊行会が編纂兼発行者として1916年に発行）。

（27）大垣市立図書館所蔵『関ヶ原御合戦物語』。

(28) 大分県立図書館所蔵写本『武徳編年集成』(碩田叢史の内) の写真帳。

(29) 加藤泰衙編『北藤録』〈伊予史談会双書第６集〉(伊予史談会編集・発行、1982年)。

(30) 上野市古文献刊行会編『公室年譜略－藤堂藩初期史料－』(清文堂出版、2002年)。

(31) 前掲『黒田家譜』。

(32)『石田軍記』〈国史叢書〉(国史研究会発行、1914年)。

(33) 前掲『関原軍記大成（三)』。

(34) 前掲『改正三河後風土記（下)』。

(35) 前掲『朝野旧聞裒藁』第10巻。前掲『朝野旧聞裒藁』第20巻。

(36)『徳川実紀』第１篇〈新訂増補国史大系〉(吉川弘文館、1981年)。

(37) 前掲『高山公実録』上巻。

(38) 前掲『朝野旧聞裒藁』第10巻。前掲『朝野旧聞裒藁』第20巻。

(39) 前掲『黒田家譜』(314～315頁)。

(40)「つるべうち（連打)」とは「鉄砲などを撃つ時、多くの打ち手が立ち並んで順次に休みなくうち出すこと。つづけうち。連発」(『日本国語大辞典（第二版)』９巻、小学館、2001年、494頁）を意味する。

(41) 前掲『石田軍記』(248頁)。

(42) 前掲『関原軍記大成（三)』(168～171頁)。

(43) 前掲『改正三河後風土記（下)』(337～338頁)。

(44) 前掲『徳川実紀』第１篇（227頁)。

(45) 国立公文書館内閣文庫所蔵『天元實記』四（請求番号150－0070)。

(46) 桑田忠親「改正三河後風土記」解題（桑田忠親監修・宇田川武久校注『改正三河後風土記（上)』、秋田書店、1976年、１頁)。

(47)『落穂集』(前掲『朝野旧聞裒藁』第10巻、828～829頁)。

(48) 前掲・国立公文書館内閣文庫所蔵『天元實記』四。

(49) 前掲『改正三河後風土記（下)』(337～338頁)。

(50) 前掲『徳川実紀』第１篇（227頁)。

(51)『国史大辞典』９巻（吉川弘文館、1988年、654頁、「朝野旧聞裒藁」の項)。

(52) 前掲『朝野旧聞裒藁』第10巻（826～831頁)。

(53) 前掲『朝野旧聞裒藁』第20巻（757～767頁)。

(54) 前掲『朝野旧聞裒藁』第10巻（826頁)。

(55) 綱文ではこのように記載しているが、この綱文の次に提示された諸史料のうち、『東西記』には「御使番」の記載はなく、『別本慶長軍記』に「御使番」の記載があるので、『東西記』ではなく『別本慶長軍記』が正しいと思われる。

(56) 前掲『高山公実録』上巻（212頁)。

(57) 前掲『公室年譜略』(156～159頁)。

(58) 岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵『関原物語』(書架番号 P21－168)。

(59) 前掲『朝野旧聞裒藁』第20巻（757頁)。

(60) 岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵『関原大條志』(書架番号 P21－167)。

(61) 前掲『関原軍記大成（三）』（169頁）。

(62)『新訂寛政重修諸家譜』第18（続群書類従完成会、1965年、200～201頁、布施重次の項）。

(63)『寛永諸家系図伝』第14（続群書類従完成会、1992年、92頁、布施重次の項）。

(64)『広島県史』近世資料編Ⅱ（広島県編集・発行、1976年、148頁）。

(65) 前掲『広島県史』近世資料編Ⅱ（179頁）。

(66) 前掲・岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵『関原大條志』。

(67) 岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵『濃州関原合戦聞書』（書架番号 P21－209）。

(68) 前掲・岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵『関原物語』。

(69) このほか、『寛永諸家系図伝』第６（続群書類従完成会、1983年、138頁、奥平貞治の項）には「問鉄砲」に関する記載がないが、「貞享書上」（前掲『朝野旧聞裒藁』第20巻、757頁、奥平美作守の項）及び『新訂寛政重修諸家譜』第９（続群書類従完成会、1965年、208頁、奥平貞治の項）には、藤堂高虎隊が松尾山に向けて鉄砲を撃った、という記載がある。このことから、『寛永諸家系図伝』が編纂された江戸時代初期の寛永期には「問鉄砲」に関する話が存在しなかったが、その後、『貞享書上』が成立した天和３年～貞享元年までの間に「問鉄砲」に関する話が創作された、と考えられ、この点は上記の指摘（寛文期あるいはそれ以前の近い時期に、歴史的事実ではない「問鉄砲」に関する話が創作されたと考えられる、という指摘）の傍証になると思われる。

(70)『国史大辞典』８巻（吉川弘文館、1987年、808頁、大道寺友山の項）。

(71) 拙稿「慶長５年６月～同年９月における徳川家康の軍事行動について（その３）」（『史学論叢』42号、別府大学史学研究会、2012年）。

(72) 例えば、江戸時代後期（19世紀）に作成された関ヶ原合戦図屏風（福岡市博物館所蔵）には、右隻左下には小早川秀秋の陣した松尾山が描かれ、家康の鉄砲隊が威嚇射撃をおこなっている状況が描かれている（小和田哲男監修『戦国武将の合戦図』、新人物往来社、2011年、123頁、この頁の執筆は土山公仁氏）。このように、「問鉄砲」のシーンが、江戸時代後期には関ヶ原合戦図屏風にも描かれていたことは、「問鉄砲」に関する話が江戸時代後期には広く流布していたことを示している。

(73)『新修福岡市史』資料編、中世１、市内所在文書（福岡市史編集委員会編集、福岡市発行、2010年、177～178頁）。

図１
「問鉄砲」の話の引用関係についての概念図

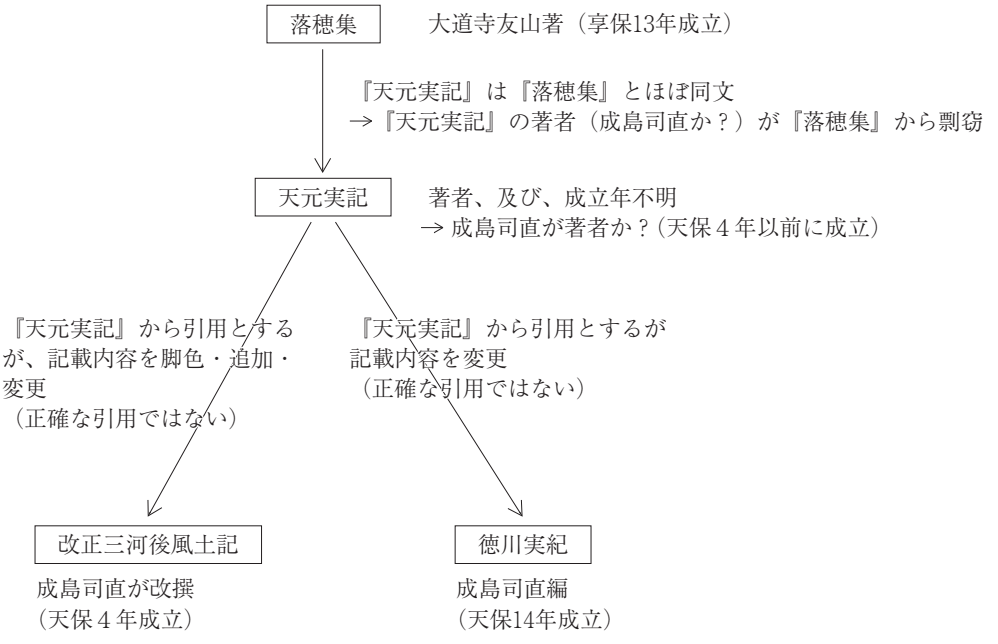

図２
「問鉄砲」の主体についての諸史料における記載の変化

寛文期（江戸時代前期）…藤堂高虎隊単独で撃った（初見は『井伊家慶長記』、寛文12年写）
→その後の史料…『貞享奥平美作守書上』（天和３年～貞享元年成立）
『関ヶ原合戦誌記』（貞享４年成立）
『寛政重修諸家譜（奥平貞治）』（文化９年成立）
『聿修録』（文政元年成立）
『東西記』（成立年不明）

↓

延宝期（江戸時代前期）…藤堂高虎隊と京極高知隊が共同で撃った（初見は『本朝武林伝（稲葉）』、延宝７年成立）
→その後の史料…『武徳安民記』（安永５年成立）
『別本慶長軍記』（成立年不明）

↓

元禄期（江戸時代中期）…福島正則隊単独で撃った（初見は『黒田家譜』、元禄元年成立）
→その後の史料…『石田軍記』（元禄11年成立）
『関原物語』（成立年不明）

↓

正徳期（江戸時代中期）…福島正則隊と家康麾下の布施孫兵衛の隊が共同で撃った（初見は『関原軍記大成』、正徳３年成立）

↓

享保期（江戸時代中期）…家康麾下の布施孫兵衛の隊が単独で撃った（初見は『落穂集』、享保13年成立）
→その後の史料…『天元実記』（天保４年以前成立）
『改正三河後風土記』（天保４年成立）
『徳川実紀』（天保14年成立）

表１
「問鉄砲」の話を収載した諸史料の内容比較表

史料名	成立年代	家康の命	鉄砲を撃った大名家など	具体的に鉄砲を撃った者	鉄砲の数	問鉄砲等についての史料上の表記	黒装束の武者一騎(注１)	空砲かどうか	久保島孫兵衛(注２)	布施孫兵衛(注３)	堀田勘左衛門(注４)	問鉄砲の結果(効果の有無)
黒田家譜(注５)	元禄元年	①	福島正則(異説として福島正則と家康から派遣)	白い笠符を付けた足軽20人 →２回つるべ撃ちにした	20挺		○		△ →異説として掲げる	△ →異説として掲げる	△ →異説として掲げる	松尾山から降りてこなかった →効果なし
石田軍記(注６)	元禄11年	②	福島正則	白い笠験を付けた足軽50人	－(50挺か？)		○	○ (空砲)				その鉄砲には少しも構わなかった →効果なし
関原軍記大成(注７)	正徳３年	③	福島正則と家康から派遣	布施孫兵衛と堀田勘左衛門の鉄砲10挺ずつ →10挺ずつをつるべ撃ちにした	20挺	誘鉄炮 誘ひ鉄炮 さそひ鉄炮(注８)			○	○	○	誘ひ鉄砲に驚いたのかまたは時刻を計ったのか、裏切りすべき内通があった →効果は半分か？
改正三河後風土記（天元実記から引用）(注９)	天保４年	④	布施孫兵衛(異説として福島正則と家康から派遣)、(異説として藤堂･京極両家)	布施孫兵衛 →鉄砲をつるべ撃ちにした(異説として布施孫兵衛と堀田勘左衛門の鉄砲10挺ずつ)(注10)(異説として藤堂･京極両家の鉄砲)		さそひ鉄炮			○	○	△ →異説として掲げる	さそひ鉄砲が聞こえると同時に裏切りを申し渡した →効果あり
徳川実紀（天元実記から引用）(注11)	天保14年	⑤	布施孫兵衛	布施孫兵衛の組の同心					△ →久留島孫兵衛某とする			山の麓から鉄砲を撃ちかけると、小早川勢はようやく色めき立って麓へ降りてきた →効果あり
天元実記(注12)	成立年不明(天保4年以前に成立)	⑥	(家康の)御先手の物頭･布施孫兵衛	布施孫兵衛の組の同心					○	○		小早川勢がそれより色めき立って軍勢を麓より差し下した →効果あり
関原御合戦当日記(注13)	成立年不明	⑦				向ヒ鉄炮	○(注14)					鉄砲を打ちかけると同時に、小早川の軍勢が大谷などの軍勢へ討ってかかった →効果あり

朝野旧聞裒藁10巻→綱文(注15)	天保12年	⑧	藤堂高虎	藤堂高虎（の家臣）			△→武者一騎とする		△→異説として掲げる	△→異説として掲げる		
※この綱文では、家康の本陣に来て小早川秀秋の不審を報告した武者一騎について、『東西記』では使番、『黒田家譜』では福島正則の使い、『落穂集』等の諸記では（家康）麾下の士・久保島孫兵衛と記しているが、『寛永譜』、『貞享書上』をはじめ諸記録すべてに「久保島」という人の所見がないので（この話が）疑わしいため、今回は（これらの諸記の説には）皆従わず、『五本関原日記』、『関原物語』等に従う、としている。そして、松尾山の小早川秀秋の陣に向けて鉄砲を撃つことを先手の藤堂高虎に家康が命じた、としている。このことに関して、福島正則の手より、藤堂高虎と京極高知両隊より、また、（家康）麾下の士・布施孫兵衛とも（諸書にあって見解が）一定していない、としている。そして、今回、『貞享奥平美作守書上』、『聿修録』、『井伊家慶長記』等の諸記を合考して、藤堂高虎と定めた（＝考定した）、としている。 →『朝野旧聞裒藁』10巻の綱文において、諸書の内容を検証して史料批判している点は評価できる。												
五本関原日記(注16)	成立年不明	⑨				問鉄炮	○					
井伊家慶長記(注17)	寛文12年写		藤堂高虎	藤堂高虎の鉄砲の者20人ばかり	－（20挺か？）			○（空砲）				しかし、小早川秀秋の陣は少しも騒がず、一向に敵陣を見下ろしていた →効果なし
聿修録(注18)	文政元年自序		藤堂高虎		－ →大銃を発する							藤堂高虎が大銃を発して脅したので、はじめて（小早川）は兵を発した →効果あり
濃州関原合戦聞書(注19) →一本関原軍記も同じ	成立年不明	⑩				問鉄炮	○					これには少しも構わず →効果なし(注20)
慶長記畧抄(注21)	成立年不明	⑪					○					
東西記(注22)	成立年不明	⑫	藤堂高虎			問ヒ鉄炮	△→五の字の指物をさした人(注23)					
別本慶長軍記(注24)	成立年不明	⑬	藤堂・京極	藤堂・京極が足軽を出して鉄砲をかけ放つ								松尾の備えは色めき立て直した →効果あり
本朝武林伝（稲葉）(注25)	延宝７年序	⑭	藤堂高虎・京極高知	藤堂高虎・京極高知が軽卒を進めて矢砲を放つ								しきりに小早川軍は周章した →効果あり

関原物語(注26) →関原記考異も同じ	元禄９年写	⑮	福島正則	福島正則の先がけの足軽50人（白い笠印を一面に付ける） →鉄砲をつるべ撃ちにした	－（50挺か？）		○	○ （空砲）				松尾山より打って出た →効果あり(注27)
落穂集(注28)	享保13年	⑯	（家康の）御先手の物頭・布施孫兵衛	布施孫兵衛の組の同心					○	○		小早川勢がそれより色めき立って軍勢を麓へ差しくだした →効果あり
石卵餘史(注29)	元文５年写	⑰ (注30) (注31)										
朝野旧聞裒藁20巻 →綱文(注32)	天保12年	⑱	藤堂高虎	藤堂高虎（の家臣）								備えを立てかえて松尾山を下ろうとした →効果あり
※この綱文では、午刻にいたり、小早川秀秋の内応がおぼつかない旨が（家康の）本陣に告げられたので、家康は気色があって、藤堂高虎に命じて小早川秀秋の陣に鉄砲を打たせた、としている（→つまり、藤堂高虎説をとる）。そして、このことは諸説まちまちである、としている（→つまり、諸史料により一定しない、としている）。さらに、今回、『貞享奥平美作守書上』、『聿修録』、『井伊家慶長記』等を合考して（藤堂高虎と考定して）記す、としている。												
貞享奥平美作守書上(注33)	天和３年～貞享元年		藤堂高虎（御先手）	御先手・藤堂高虎の備え								
落穂集(注34)	享保13年		布施（孫兵衛）	布施（孫兵衛）		誘鉄炮						誘鉄砲の音が聞こえると同時に、裏切りを触れて山下へ押しおろした →効果あり
関ヶ原合戦誌記(注35)	貞享４年	⑲	藤堂高虎	藤堂高虎の備え		問鉄炮	○ →黒具足を着けた使番衆一人					この鉄砲に少しも構わず、尾崎山より打って出た →効果なし
翁物語(注36)	家康へ味方する合図として、関ヶ原の戦場に（小早川秀秋から）鉄砲を3つ打って、それを合図にして（家康の）味方にまいる、と約束した。そして、家康は、（小早川秀秋から）合図の鉄砲がなければ、小早川秀秋を討ち取れと命じた。 →『翁物語』の記載内容は通説の「問鉄砲」の話と異なり、異説であるが参考のために掲げる。											
武徳安民記(注37)	安永５年序	⑳	京極・藤堂	京極・藤堂の手		迎鉄砲	○					

寛政重修諸家譜（奥平貞治）(注38)	文化９年		藤堂高虎	藤堂高虎の備え→松尾山に向かって試しに鉄砲を発する								
関原大條志(注39)	貞享３年写	㉑					○→黒具足武者					これに少しも構わず、1万余が大谷吉継（隊）に切ってかかった→効果なし

※上表における各史料の掲載順は、概ね本稿の本文中での掲載順になっており、各史料の成立年代の編年順にはなっていない。

（注１）黒装束の武者一騎については、家康の御前で小早川秀秋の状況が不審であると報告した人物である。黒装束の武者は、家康の御家人・久保島孫兵衛（『黒田家譜』）、福島正則のところから来た使者（『黒田家譜』）とする説がある。

（注２）久保島孫兵衛は、家康の御家人（『黒田家譜』）とする説がある。

（注３）布施孫兵衛は、家康の本陣から来た者（『黒田家譜』）、家康の弓長（『関原軍記大成（三）』〈国史叢書〉）、家康の銃頭（『朝野旧聞裒藁』10巻所収の『関原軍記大成』）、家康の鉄砲頭（『改正三河後風土記』）、先手の物頭（『落穂集』）とする説がある。

（注４）堀田勘左衛門は、福島正則の鉄砲頭（『黒田家譜』）とする説がある。

（注５）貝原益軒編著『黒田家譜』（歴史図書社、1980年、314～315頁）。

（注６）『石田軍記』〈国史叢書〉（国史研究会発行、1914年、248頁）。

（注７）宮川尚古著『関原軍記大成（三）』〈国史叢書〉（国史研究会発行、1916年、248頁）。

（注８）『朝野旧聞裒藁』10巻収載の『関原軍記大成』では「さそひ鉄炮」と記されている。

（注９）桑田忠親監修・宇田川武久校注『改正三河後風土記（下）』（秋田書店、1977年、337～338頁）。

（注10）この異説をもとに考えると、鉄砲は合計20挺になる。

（注11）『徳川実紀』第１篇〈新訂増補国史大系〉（吉川弘文館、1981年、227頁）。

（注12）国立公文書館内閣文庫所蔵『天元實記』四。

（注13）藤井治左衛門編『関ヶ原合戦史料集』（新人物往来社、1979年、398頁）。

（注14）黒糸縅（おどし）の鎧を着た（家康の）御使番一人。

（注15）『朝野旧聞裒藁』10巻〈内閣文庫所蔵史籍叢刊・特刊第一〉（汲古書院、1983年、826頁）。

（注16）前掲『朝野旧聞裒藁』10巻（827頁）。

（注17）前掲『朝野旧聞裒藁』10巻（827頁）。

（注18）前掲『朝野旧聞裒藁』10巻（827頁）。

（注19）前掲『朝野旧聞裒藁』10巻（827頁）。

（注20）「問鉄砲」の効果がなかった、とする記載は、岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵『濃州関原合戦聞書』（書架番号 P21－209）による。

（注21）前掲『朝野旧聞裒藁』10巻（827頁）。

（注22）前掲『朝野旧聞裒藁』10巻（827～828頁）。

（注23）五の字の指物をさした者は、徳川家の使番であると考えられる。

（注24）前掲『朝野旧聞裒藁』10巻（828頁）。

（注25）前掲『朝野旧聞裒藁』10巻（828頁）。

（注26）前掲『朝野旧聞裒藁』10巻（828頁）。

（注27）この箇所については、岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵『関原物語』（書架番号 P21－168）による。

（注28）前掲『朝野旧聞裒藁』10巻（828～829頁）。

（注29）前掲『朝野旧聞裒藁』10巻（829頁）。

（注30）家康が鉄砲を撃つように命じた記載はあるが、鉄砲を撃ったという記載はない。

（注31）按語では松平忠吉・福島正則・井伊直政から使者を小早川秀秋のところへ遣わしたのは、『石卵餘史』と『関箇原軍記』に見られる異説とする。

（注32）『朝野旧聞裒藁』20巻〈内閣文庫所蔵史籍叢刊・特刊第一〉（汲古書院、1984年、757頁）。

（注33）前掲『朝野旧聞裒藁』20巻（757～758頁）。

（注34）前掲『朝野旧聞裒藁』20巻（759～761頁）。

（注35）前掲『朝野旧聞裒藁』20巻（761～763頁）。

（注36）前掲『朝野旧聞裒藁』20巻（765～766頁）。

（注37）上野市古文献刊行会編『高山公実録』〈藤堂高虎公伝〉上巻（清文堂出版、1998年、209～210頁）。

（注38）『新訂寛政重修諸家譜』第９（続群書類従完成会、1965年、208頁）。

（注39）岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵『関原大條志』（書架番号 P21－167）。

【凡例】

上表の各史料における「家康の命」の欄についてそれぞれ番号（丸数字）を付けたが、それぞれの番号（丸数字）に該当する各内容は以下のようになる。

①…福島正則隊の鉄砲20挺を組にして、２回つるべ撃ちに、松尾山に向けて撃たせよ

②…福島の先駈の足軽50人（に）白い笠験（かさじるし）を付けて遣わし、松尾山に差し向けて、鉄砲を玉なしで二返し打たせよ

③…久保島孫兵衛が小早川秀秋の陣に向かって「誘鉄砲」を撃たせて物色を見よ

④…久保島孫兵衛が先手へ駆けて行って松尾山へ「さそひ鉄砲」を撃ちかけて様子を見るべし

⑤…久留（マ）島（マ）孫兵衛が松尾山に行き、鉄砲を撃ちかけてみよ

⑥…黒糸縅（おどし）の鎧を着た使番一人を召して、松尾山の敵の色が見えないので、「向ヒ鉄砲」を撃たせよ

⑦…久保島孫兵衛が行って、小早川秀秋の備えがある松尾山へ上より鉄砲を放ちかけてみるように

⑧…御先手の藤堂高虎に命じて、小早川の陣に鉄砲を撃たせた

⑨…「問鉄砲」を撃たせよ、との御意であった

⑩…「問鉄砲」を撃たせるべき旨の御諚

⑪…鉄砲を放ってみよと命じた

⑫…「問ヒ鉄砲」を撃ってみよ、との御意

⑬…松尾山の方へ鉄砲を撃ちかけるべし、と使番に告げる

⑭…松尾山に向かい鳥銃を放ち当たる（ように）

⑮…福島正則の先がけの足軽50人（に）白い笠印を一面に付けて、松尾山に向けて鉄砲玉なしで二返し撃たせよ

⑯…久保島孫兵衛が行って、小早川秀秋の備えがある松尾山の上（に向けて）鉄砲を放ちかけてみるように

⑰…人を遣わして鉄砲を撃ち掛けよとの仰せであった

⑱…藤堂高虎に命じて、小早川秀秋の陣に鉄砲を撃たせた

⑲…「問鉄砲」を撃ち掛けるべし、と命じた

⑳…京極・藤堂の手より「迎鉄砲」を放つべき由を命じた

㉑…（小早川秀秋の陣に）向かって鉄砲を打ち掛けよと命じた